

研究代表者 所属・職：社会福祉学部・教授

氏 名：野尻 紀恵

研究課題名：子どもを中心とした地域ふくし拠点づくりと支援者ネットワークに関する研究
—美浜町における子どもの居場所支援の実践を通して—

研究の概要

美浜町においては、地域福祉計画に「居場所」支援の取り組みが明記されている。中でも子どもや子育て世帯を対象とした取り組みは、これまでに「子ども食堂」1つ、「子どもの夜の居場所（子ども食堂含む）」が1つ、「子育て世代を意識したみんなの居場所」が1つ、「子育て中の母親の居場所」が1つ立ち上がっていた。しかし、これらインフォーマルな活動者同士のつながりや、インフォーマルな活動者とフォーマルな活動者のつながりは上手くできていないのが現状があった。さらに、3年間の新型コロナウイルス感染症の影響のため、発達してきた子どもの居場所支援は、2018年以降中断や縮小を余儀なくされてきた。

これらの状況から、子ども自身や子育て世代が地域とつながり、安心して過ごせる空間・時間をいかに再創出していくかは、美浜町の課題の一つとなっている。

全国的には、子どもの貧困や社会的孤立などの問題状況に対して、各地で学習支援や子ども食堂が行われるようになり、年々その数は増加傾向にある。例えば「子ども食堂」では、地域の潜在的な資源が活用され、数多くの人たちが集いコミュニティを形成することができている。このような取り組みは、子どもたちに安心した食事の場を与えるだけでなく、そこに集う大人もつながり、多様な関係性が紡ぎだされているという報告もある。まさに「ふくし」を地域で展開する地域ふくし拠点となる可能性を示していると言える。

よって、本研究は、美浜町において子ども・子育てに働きかける地域のフォーマルな活動者、インフォーマルな活動者のネットワーク化のプロセスはどのような様態であるのか、実践に基づいて明らかにしていくことを目的とする。

具体的な研究内容は下記の通りである。

(1) これまでの研究成果の整理

- ①美浜町における子どもの課題・障害を持つ子どもの課題・子育ての課題の整理
- ②子ども食堂の先駆的実践地の記録の整理
- ③コロナ禍による子どもの居場所の状況、その後の再開について、影響や工夫・効果について調査
- ④美浜町奥田地区における子どもの居場所支援（ふぁみりー基地）の再開実践

↓

子どもを中心とした地域ふくし拠点の体制整備のために必要な促進要因を示す。

(2) 美浜町における子ども中心の居場所活動者のネットワークづくりの実践

- 1) 学生と地域の方々との協同実践の場に、研究者が参与観察者として入り、その場で起こっている事象を記録する。
- 2) 子どもの変容、保護者の変容を中心に据えながらも、実践者としての学生の変容、地域の支援者たちの変容などを重層的にとらえ、子どもの夜の居場所というコミュニティづくりの場で起こる事象を立体的に捉える。
- 3) 支援者が相互に情報共有できる場づくり
- 4) ネットワーク化のプロセスの実践・参与観察

↓

美浜町において子ども・子育てに働きかける地域のフォーマルな活動者、インフォーマルな活動者が何をきっかけにネットワークを広げていくのか、そのネットワーク化のプロセスはどのような様態であるのか、実践に基づいて明らかにしていく。

達成状況・成果内容

【達成状況】

- ①美浜町奥田地区における子どもの居場所支援「ふぁみりー基地」の再開を果たすことができた。
- ②「ふぁみりー基地」の再開にあたっては、特定非営利活動法人チャレンジドと共催とし、地域共生社会の実践としても成果があがったと考えられる。
- ③美浜町において子ども・子育てに働きかける地域のフォーマルな活動者、インフォーマルな活動者のネットワークの広がりには至らなかった。
- ④そのため、何をきっかけにネットワークを広げていくのか、そのネットワーク化のプロセスはどのような様態であるのか、明らかにするには至らなかった。

【成果内容】

- ①美浜町奥田地区における子どもの居場所支援「ふぁみりー基地」の再開を果たすことができた。
- ②「ふぁみりー基地」の再開にあたっては、特定非営利活動法人チャレンジドと共催とし、地域共生社会の実践としても成果があがったと考えられる。

実践の日時：第1・第3木曜日の夜

実践の場所：特定非営利活動法人チャレンジド（借用）

実践の中心：学生、地域住民、チャレンジド職員

実践の内容：居場所における遊び・学習支援・子ども食堂・子育ての相談機能

結果

居場所が子ども支援の地域福祉拠点になる可能性が見えてきた。

子育ての相談や、何気ない会話からの気づきが子育てに重要な活力をもたらすことが実践された。

地域共生社会の実現に向けた地域での取り組みにヒントを得た。

クリスマス会では、「ふぁみりー基地」利用者、チャレンジド利用者、実践者、支援者、地域の方々が一つの空間に集い、それぞれの役割で参加することができた。



障害のある無しに関わらず、大人も子どもも、皆が集う場を創出することが可能ではないかという希望を持つことができた。地域共生社会の理念である「誰も取り残さない」「誰もが主体となる」が、子ども中心の居場所の取り組みの中でも実現が可能であり、そこからネットワークが広がる期待を持つことができた。